

## 2022 (R4) 年度 学修行動調査 結果報告 (全学科・専攻)

2022 (R4) 年 9 月

I R委員会/ 教育・学修支援センター

### 【本報告書の概要】

本報告書は、2022 年度上半期に本学に在籍をしている全学部生(休学者を除く)を対象として、日々の学修行動の様態や成長実感、授業内容への満足度などを把握するために実施した「学修行動調査」の結果を集計、及び分析したものである。なお、調査は 2022 年 5 月～6 月にかけて、本学の LMS である moodle を用いたオンライン方式で実施した。

今年度は対面授業がほぼ全面的に再開したことによって、昨年度と比較して、授業や実験の受講時間が大きく上昇した。また、コロナ禍の影響で昨年まで大きく減少していたクラブ・サークルやアルバイトといった活動に費やす時間も増加する傾向が見られた。

授業内での経験については「授業内での議論」や「実習・実験といった体験的な学び」といった、遠隔型授業では実施に制限があり、「頻繁にあった」「時々あった」という回答の割合が低調に推移していた項目について、今年度は大きく増加した。

学生が成長を実感している能力とこれから成長させたいと思う能力については、今年度より入学年度別の分析を実施したが大きな差はなく、共にどの段階においても「専門的能力」との回答が最多となった。ただし、特徴として「外国語の能力」が挙げられ、この能力については各段階において、成長実感こそ乏しいものの、成長を希望する能力としては一定数の回答が見られた。

授業内容の満足度については授業内での経験の増加と呼応するように、ほとんどの項目で一昨年度から連続して上昇した。

コロナ禍が続く中で対面授業再開ということで一定の制限がある中においても、教育を受ける側と教育を提供する側の双方の努力や創意工夫によって、少しずつ以前の状況を取り戻しつつあることが見受けられる結果となった。

### 【回答状況】

| 2022 (R4) 年度 | 対象者数(人)      | 回答者数(人)      | 回答率 (%)     | 2021(R3)年度(%) |
|--------------|--------------|--------------|-------------|---------------|
| 日本語日本文学科     | 218          | 180          | 82.6        | 84.5          |
| 歴史文化学科       | 217          | 157          | 72.4        | 76.3          |
| 幼児教育専攻       | 334          | 272          | 81.4        | 77.1          |
| 学校教育専攻       | 305          | 210          | 68.9        | 76.2          |
| 特別支援教育専攻     | 122          | 74           | 60.7        | 67.5          |
| 人間社会学科       | 304          | 279          | 91.8        | 93.8          |
| スポーツ健康学科     | 403          | 296          | 73.4        | 84.2          |
| 薬学科          | 753          | 678          | 90.0        | 96.5          |
| <b>全学</b>    | <b>2,656</b> | <b>2,146</b> | <b>80.8</b> | 85.4          |

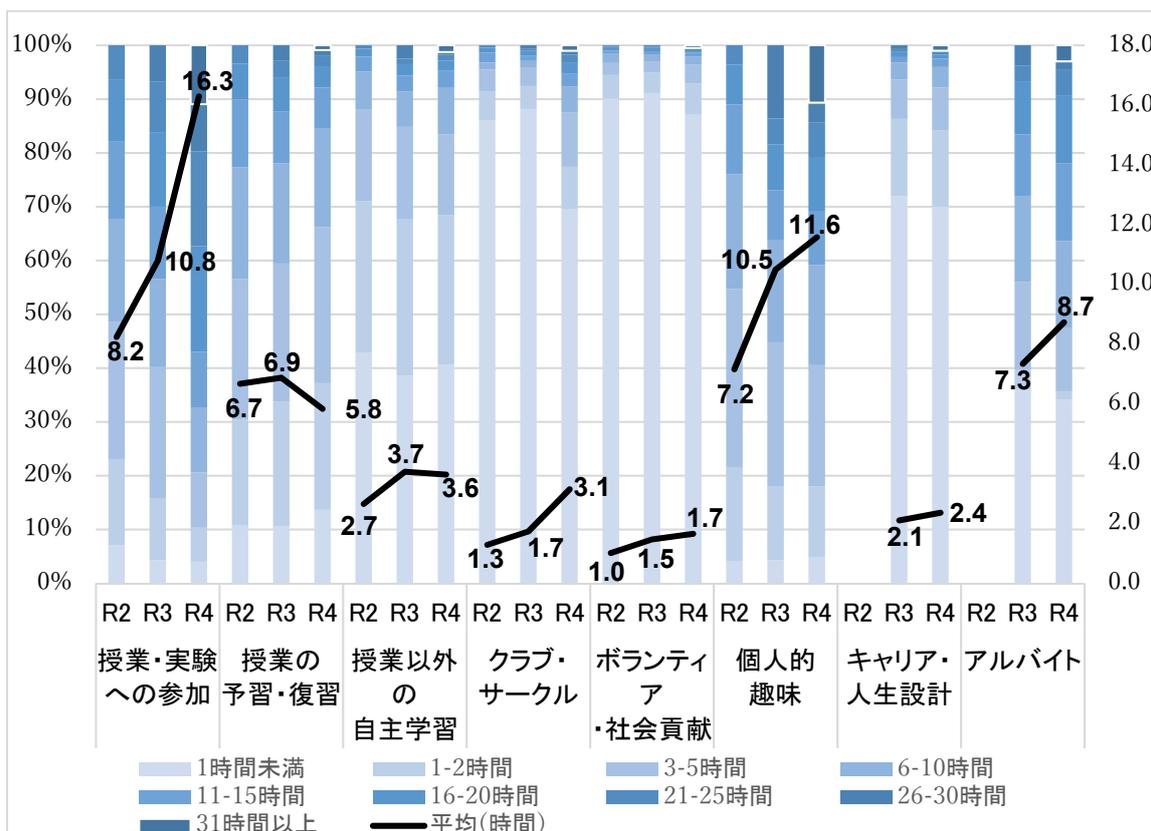
回答期間: 令和 4 年 5 月 24 日～6 月 11 日(※一部の学科・専攻については 6 月 18 日まで延長)

【考察】

・昨年度より運用しているガイドラインをもとに、各学科・専攻の回答率の状況に応じて、締切日を弾力的に設定した。加えて、教育・学修支援センターからの学生への直接の回答督促と、IR 委員より、各ゼミ教員を通じての回答督促を依頼することで昨年度は下回ったものの全体で 80%代の高い回答率を得ることができた。しかし、一部の学科・専攻では昨年度より回答率がやや大きな幅で低下しており、注視する必要がある。

【I : 1週間の時間の使い方(8項目)】

(※「キャリア・人生設計」、「アルバイト」については R3 年度より設置した項目である)



【考察】

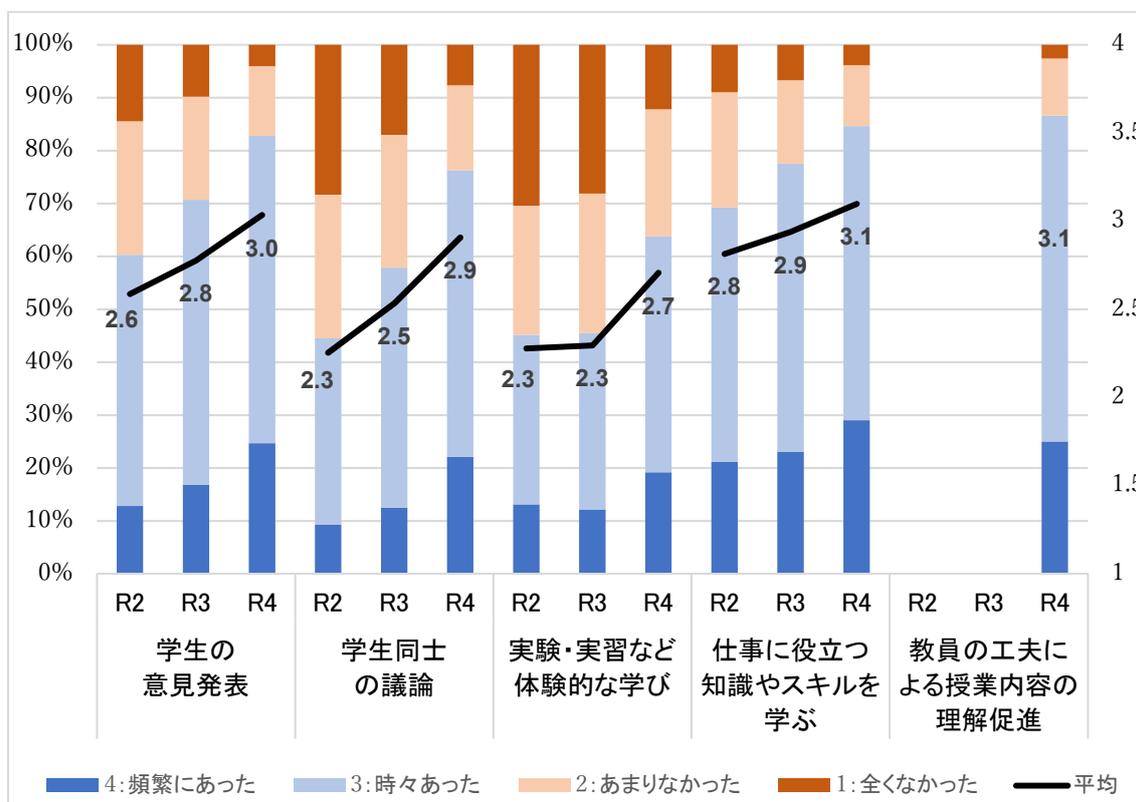
・「授業・実験への参加」時間数について、ここで示しているグラフには表記されていないが、コロナ前(R1 年度)の平均時間は 15.2 時間であった。対面授業がほぼ再開されたことによってコロナ前の水準に戻ってきたことが示唆される。ただし、本設問については、昨年度学生より「1 週間を合計した時間を答えればよいのか、1 週間の中で平均した時間を答えればよいのかわかりづらい」という指摘があったため、今年度より設問の最初に「学期中の通常の1週間を振り返り、その 7 日分を合計した時間を回答してください」という文言を追加することとした。このことと合わせ、今年度大幅な上昇に転じた可能性も考慮する必要がある。

・「授業の予習・復習」については低下が見られた。これは、昨年度は調査実施時には遠隔型での授業実施がほとんどであり課題の量が今年度より格段に多かったことも影響していると思われる。

・その他の項目については、いずれも上昇している。中でも「アルバイト」の時間は比較的大きな幅で上昇した。

【Ⅱ：授業内での経験(4項目)】

(※「教員の工夫による授業内容の理解促進」については R4 年度より設置した項目である)



【考察】

・本設問については全ての項目で昨年度と比べ上昇した。これについても一昨年度、昨年度と比べ、対面型授業が大幅に増加したことが影響していると思われる。

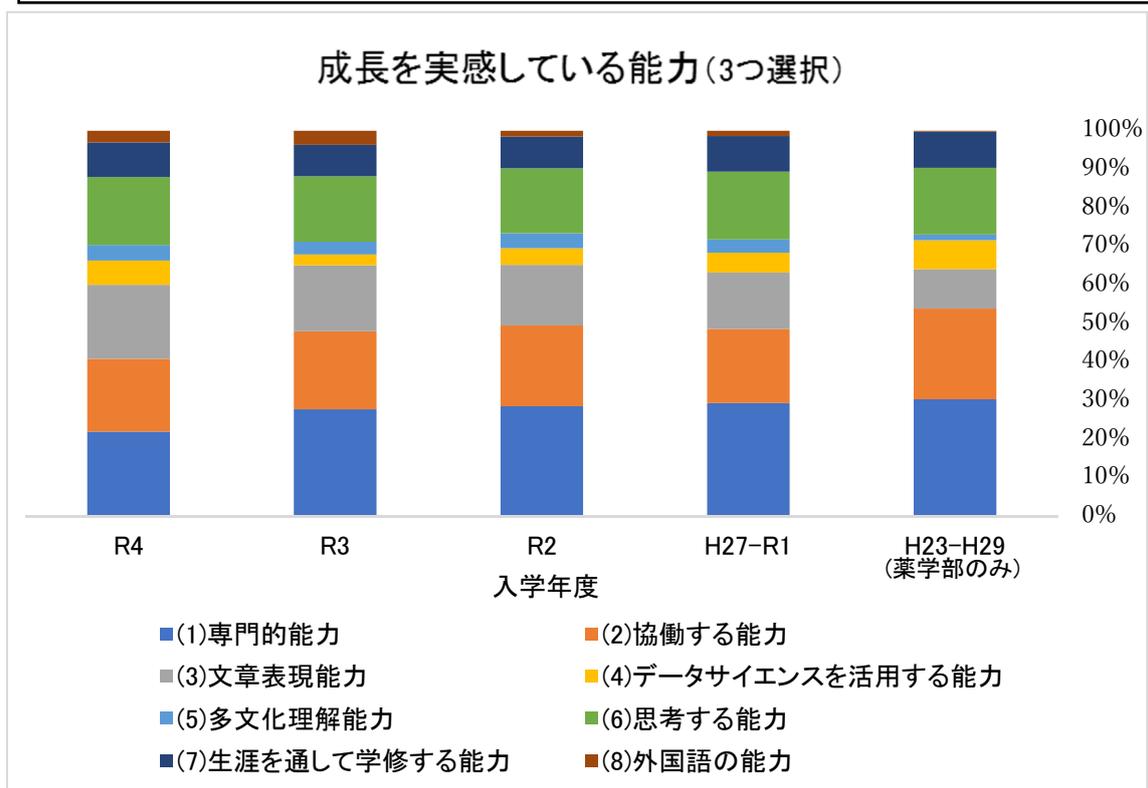
・「教員の工夫による授業内容の理解促進」は今年度より追加した項目である。これは文部科学省が昨年度に第2回目の試行を行った「全国学生調査」の項目に準拠したものである。

【Ⅲ：成長を実感している能力と成長への満足度(4項目)】

※各能力の概要・例は以下の通りである。

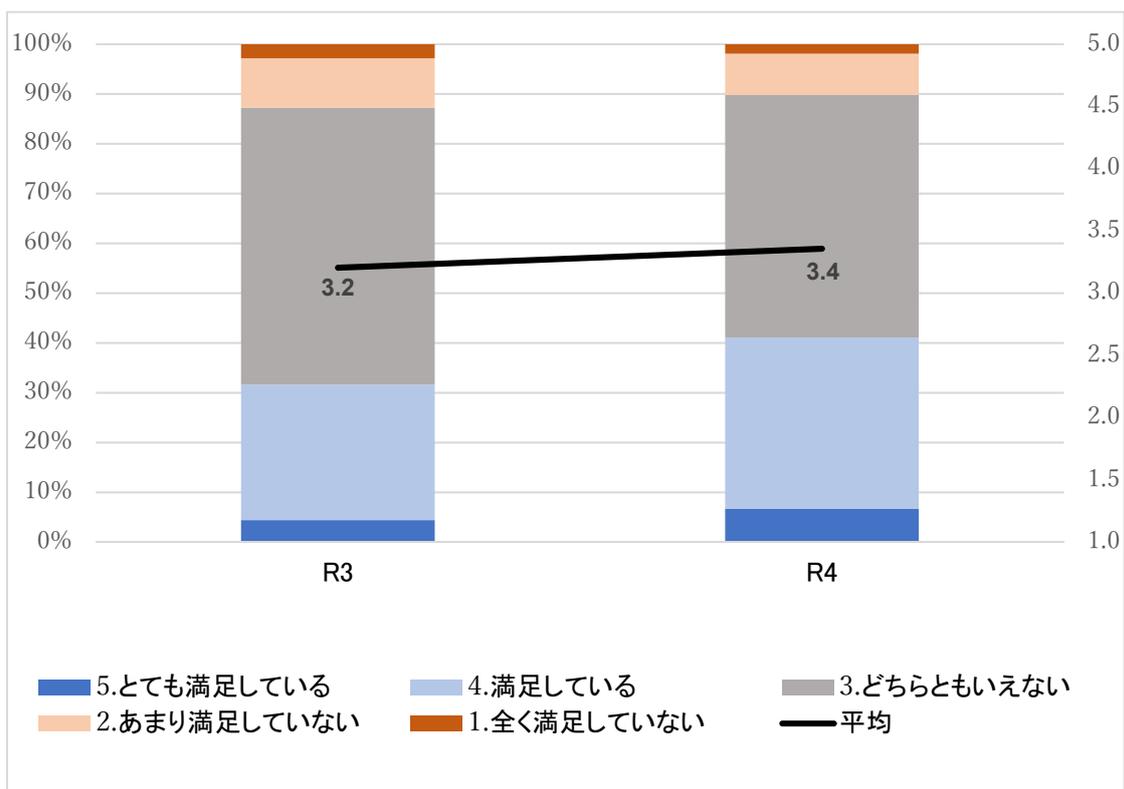
1人あたり3項目まで選択して可能である。グラフの各項目は、回答総数(3項目×回答者数)に占める割合(%)で示しているため、回答者全員が同じ項目を選択して回答した場合の値(すなわち理論上の最大値)は33.3%となる。

- (1) 専門的能力(例:専門分野についての知識や技能、将来の職業に関する知識や技能)
- (2) 協働する能力(例:人間関係を構築する能力、周りと協力して課題に取り組む能力、自らの意見をわかりやすく伝える能力)
- (3) 文章表現能力(例:レポートを書く際や試験の際に文章を論理的に書く能力)
- (4) データサイエンスを活用する能力(例:身の回りにある様々なデータを収集し読み解く能力、情報倫理を身につける能力)
- (5) 多文化理解能力(例:グローバルな問題や地域的な課題への理解や関心、異なる文化に関する知識・理解)
- (6) 思考する能力(例:様々な角度や広い視野から物事を捉える能力、解決すべき課題を発見する能力)
- (7) 生涯を通して学修する能力(例:幅広い知識、多面的な物の見方、自ら学修する習慣)
- (8) 外国語の能力(例:外国語でコミュニケーションをとる能力、外国語で読み書きする能力)



(※「H23-29」は薬学部のみデータである)

● 現時点において自らの能力の成長度合いについてどれくらい満足していますか。

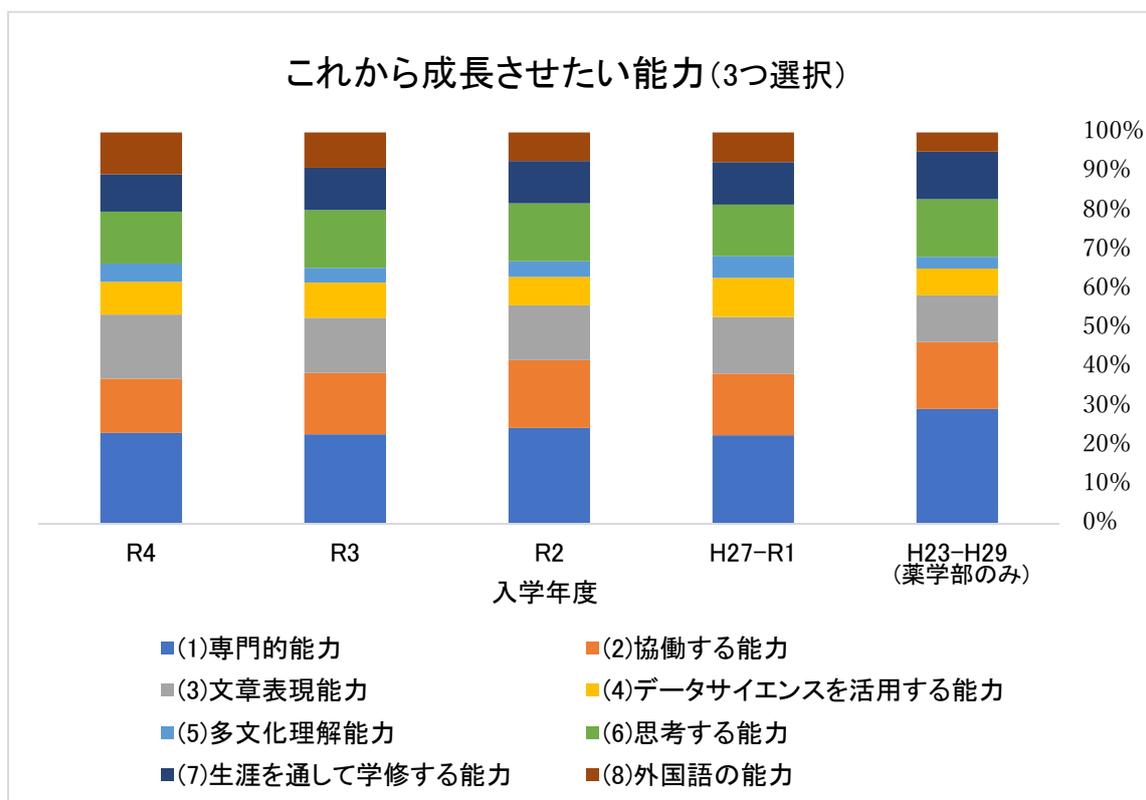


【考察】

- ・本設問 1～3 は一昨年度まで「大学入学時と比べて身についた能力・知識」として 17 項目を設定し、「かなり身についた」から「全く身につけていない」までの 5 件法で問うていた設問を、昨年度より項目数を 8 つまで絞り込み、問い方についても自身が成長したと実感している能力の上位 3 項目を選択する方式に変更したものである。
- ・結果的に入学年度ごとの能力の伸びの実感に大きな差は認められなかったが、入学当初は「文章作成能力」や「外国語の能力」の伸びを実感しやすく、進級するにつれて「専門的能力」の伸びが実感しやすくなる傾向が見られる。
- ・成長度合いの満足度については昨年度と比較して上昇したものの、大きな差は見られなかった。

【IV:これから成長させたいと思っている能力(3項目)】

※各能力の概要・例はⅢで示したものと同一である。



(※「H23-29」は薬学部のみデータである)

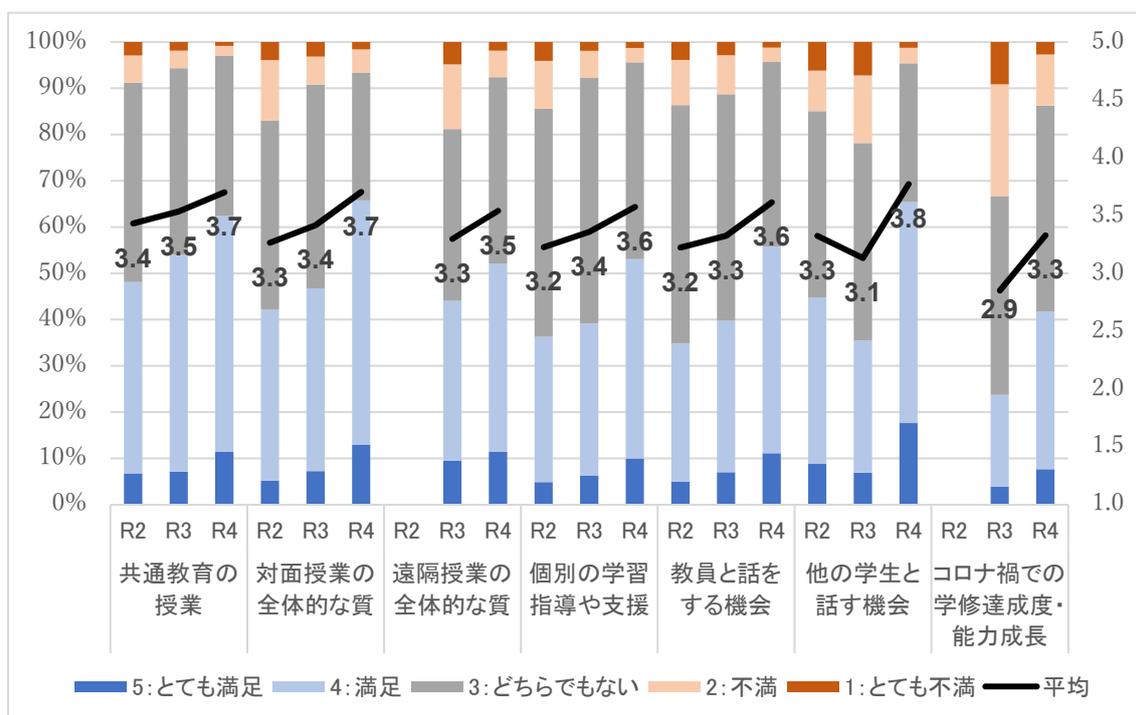
【考察】

・本設問は昨年度より設置している項目である。先に考察したⅢの設問では「これまでに成長を実感している能力」について問うたが、ここでは「これから成長させたい能力」を問うている。

・Ⅲと同様に入学年度ごとで大きな差はみられなかった。

【V:教育内容の満足度(7項目)】

(※「遠隔授業の全体的な質」、「コロナ禍での学修達成度・能力成長」については R3 年度より設置した項目である)



【考察】

- ・昨年度、それまでと比べて多くの項目で満足度が回復したが今年度も回復傾向を維持している。
- ・特に「他の学生と話す機会」は大幅に上昇しており、対面授業再開の影響が非常に大きいと見受けられる。
- ・「コロナ禍での学修達成度・能力成長」の項目も昨年度と比べて上昇しており、学生が新しい学修様式に順応していることが読み取れる。

以上